



[氏名] 西脇 健太郎
[出身都道府県] 岐阜県
[卒業期] 25期（平成14年度卒）



自治医大の後輩の皆さんへ。

大学も初期研修先も規模の大きな病院で経験され、その後へき地等に派遣される際、あまりに設定が違うため、戸惑いを感じることも多いでしょう。私も同じ気持ちかかえたまま、地域に派遣された卒業生の一人です。悩んだ時期も正直ありましたが、今振り返ってみると、へき地派遣は自分の人生にプラスに働いた、自治医大の卒業生だからこそ経験できることだと考えています。

学生時代、岐阜県の行事で夏休みに主に義務年限内医師が派遣される診療所の見学実習がありましたが、全てのへき地の診療所に行けませんでした。大学のカリキュラムでは、5年生の時に2週間、地域医療振興協会が運営する岐阜県揖斐郡北西部地域医療センター久瀬診療所にて実習もさせていただきました。



研修医時代の頃を振り返ってみると、出身県の都合で、卒後三年目でへき地派遣はほぼ確実で、場合によっては医師一人勤務の診療所に勤務ということもあるから、きちんと研修をこなさいと周囲から言われていました。へき地勤務を終えた後は各科専門医を取得のため、当時は研修医の間に地元ないし近隣の大学の医局に籍を置くことが通例でした。私も同じようにその流れに乗るつもりで準備を進めていました。どちらかというと、へき地は義務だから行く、できるだけその後の病院勤務の着地点をどうするかが大切だという意識でした。

三年目の派遣先の決定は唐突でした。3月20日過ぎに県庁から電話があり派遣先が判明。学生時代、全く行ったことのない、高鷲(たかす)診療所へ行けとのこと。幸いしたのが医師二人体制の診療所で、愛知県の大先輩にご指導頂きながら働くことになりました。派遣当初は、外来診療の経験はほぼなし、在宅医療の経験なし、内視鏡もかじった程度と何もできないに近い状態で日々の診療についていくだけで必死でした。医学的知識・技術が追い付かないだけでなく、方言も同じ県内で相当違うため、患者さんとの会話についていけず、看護師に翻訳してもらいながら診療、苦戦しました。



一方、経験の浅い医師を診療所の職員、役場職員の皆さんが様々な形で支えてくださったり、地域住民の方も応援してくださったりで、それに応えたくてなんとか働き続けました。

卒後五年目、上司が開業に伴い退職することになり、私一人で診療所に残ることになりました。仕事もほぼ自分でこなせるようになり、幸い、同じ市内に勤務される施設の先輩が、様々な形で支援して下さり、不安はありませんでした。岐阜県の場合、義務内の医師が孤立することがない仕組みができており、安心して働くことができるようになっていきます。

地域医療に長く携わりたいという想いに切り替わった時期も、この卒後5年目の頃でした。目指すところも都市部の病院から、地域の診療所に大きく変えましたが、迷いはありませんでした。

現在は地域医療振興協会の職員として、岐阜県揖斐川町の谷汲中央診療所に勤務しています。学生時代お世話になった久瀬診療所の隣村になります。

実は本籍地近い場所で、診療所から近いところに住みながら働いています。近隣の久瀬、春日、谷汲の3診療所で緩やかなグループ診療をしており、一人で抱え込まなくても良い勤務体制が実現できました。医師6名のグループですが、自治医大卒は私一人です。



私の場合、様々な偶然が重なり、比較的長期、地域で働いています。自分で積極的に道を切り開いたというより、先輩方や地域の皆様が支えて下さり、流れに乗ったところが大きかったように思います。皆さんの不安を解消するのにつながる文章ではないかもしれませんが、構え過ぎず、地域に飛び込んでいただくきっかけになればと思います。

自治医大を卒業された皆さんなら

きっと流れに乗れますから。大丈夫です。